

新島襄とは何者か

— その人生と精神を読み解く —

本シンポジウムでは、新島襄が残した精神を歴史的に検証すると同時に、それを現代に生かすための方法を模索します。それは同志社の特殊性（ユニークさ）を、同志社コミュニティを超えた普遍性へと接続する試みでもあります。講演の後、良心学研究センターによる近刊『新島襄 365』の執筆者全員がコメンテーターとして登壇し、多様な角度から「新島襄とは何者か」に迫っていきます。なお、来場者には『新島襄 365』を無償配布いたします。

● 日時：2019年 **10月29日**（火）16:40 — 19:00

● 場所：同志社大学 今出川キャンパス 同志社礼拝堂

● 講演：沖田行司

（同志社大学 名誉教授）

小原克博

（神学部 教授、良心学研究センター長）



コメンテーター（『新島襄 365』執筆者）：木原活信（社会学部 教授）、神田朋美（神学研究科後期課程学生）、中村信博（同志社女子大学 学芸学部 教授）、貫名信行（脳科学研究科 教授）、林田 明（理工学部 教授）、深谷 格（司法研究科 教授）、和田喜彦（経済学部 教授）

■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター

CONSCIENCE

E-mail: rc-csc@mail.doshisha.ac.jp <http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

良心を世界に—良心を覚醒させる知の連携と知の実践 良心学研究センターは、現代世界における「良心」を考察し、その応用可能性・実践可能性を探求することを通じて、学際的な研究領域として「良心学」を構築し、さらにその成果を国内外に発信し、新たな学術コミュニティを形成することを目的としています。

講師略歴

沖田行司（おきた・ゆくじ）

1948年京都府生まれ。同志社大学 社会学部教授。専門：日本思想史・日本教育文化史。博士（文化史学）論博。

1979年3月、同志社大学大学院文学研究科文化史学専攻博士後期課程満期退学。1979年4月、同志社大学文学部助手、専任講師、助教授を経て、1990年4月に文学部教授となり、改組転換で2005年に社会学部教授。ハワイ大学日本研究所客員研究員（1989～1990）、中国人民大学客座教授（2003～2013）。2019年3月、同志社大学を退職。この間、国際センター所長・社会学部長・同志社体育会長・同志社ラグビー部長を歴任。現在、同志社大学名誉教授。

単著：『日本国民をつくった教育：寺子屋からGHQの占領教育政策まで』2017年、ミネルヴァ書房。『日本人をつくった教育』2000年、大巧社。『新訂版 日本近代教育の思想史研究』2007年、学術出版会。『藩校・私塾の思想と教育』2011年、日本武道館。編著：『教育社会史』（新体系日本史16）2002年、山川出版。『人物で見る日本の教育』2012年、ミネルヴァ書房。共著：『応用倫理学講義 6 教育』2005年、岩波書店。『近代東アジアの経済倫理とその実践』2009年、日本経済評論社。『横井小楠：公共する人間』2010年、東京大学出版。『正義とは』2012年、岩波書店。『知るとは』2012年、岩波書店。

小原克博（こはら・かつひろ）

1965年、大阪生まれ。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。博士（神学）。現在、同志社大学神学部教授、良心学研究センター長。

専門はキリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。先端医療、環境問題、性差別などをめぐる倫理的課題や、宗教と政治およびビジネス（経済活動）との関係、一神教に焦点を当てた文明論、戦争論などに取り組む。神道および仏教をはじめとする日本の諸宗教との対話の経験も長い。

単著として『ビジネス教養として知っておきたい 世界を読み解く「宗教」入門』（日本実業出版社、2018年）、『一神教とは何か——キリスト教、ユダヤ教、イスラームを知るために』（平凡社新書、2018年）、『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』（晃洋書房、2010年）、『神のドラマトウルギー——自然・宗教・歴史・身体を舞台として』（教文館、2002年）、共著として『人類の起源、宗教の誕生——ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき』（平凡社新書、2019年）、『宗教と社会の戦後史』（東京大学出版会、2019年）、『良心学入門』（岩波書店、2018年）などがある。

HP: <http://www.kohara.ac>

新島襄の遺志を継ぐ

沖田行司

【課題】

「新島襄とは何者か」を語る際に、宿志半ばにして天に召され新島襄が、同志社に残した遺言とは何であったのか、新島の宿志とは何であったかという事から始めたい。次に「建学の精神」として伝えられてきた言説について、その起源等を「新島の言葉」に遡って考えてみたい。

1. 新島襄の遺言

1890(明治23)年1月21日から22日未明にかけて、新島襄は神奈川県大磯の旅館で危篤状態となる。妻の新島八重・小崎弘道・徳富蘇峰を枕元に呼び寄せ、最後の力をふり絞って1時間40分にわたり、同志社の行く末を案じながら、同志社に遺言を残した。

- ① 同志社の前途は、**キリスト教の徳化**、文学、政治等の興隆、学芸の進歩、三者相伴い、相俟ちて行うべき事
 - ② 同志社教育の目的は、その神学、政治、文学、化学等に従事するに関わらず、皆、精神、活力あり**真誠の自由を愛し**、もって邦家に尽くすべき人物を養成するを務べき事
 - ③ 社員たるものは生徒を鄭重に取り扱うべき事
 - ④ 同志社においては、倜儻不羈なる書生を圧束せず、務めてその本性に従い、これを順導し、もって天下の人物を養成すべき事。
 - ⑤ 同志社は隆なるに従い、機械的に流るる恐れあり。切にこれを戒慎すべき事
 - ⑥ 金森通倫氏をもって余の後任となす、差支えなし。氏は事務に幹練し、才鋒当たるべからざるの勢いあり。しかれどもその**教育家として人を順育し、これを誘掖するの徳に欠け、あるいは小刀細工に陥るの弊なしとせず**。これ余の窃かに遺憾とする所なり。
 - ⑦ 東京に政法理財学部を措くは、目今の事情、到底避くべからざるかと信ず。
 - ⑧ 日本教師と外国人教師の關係に就いては努めて調停の勞を取り、もってその円滑を維持すべき事。余はこれまで幾度かこの中間に立ちて苦心あり。将来と雖も、社員諸君が日本教師に示すにこの事をもってせんことを望む。
 - ⑨ 余は平生敵を作らざるを期す。もし諸君中、あるいは余に対して稔然たらざる人あらば、幸いにこれを恕せよ。余の胸中、一点の芥弗あらず。
 - ⑩ 従来の事業、人あるいはこれを目して余の功とす。しかれども、これ皆、同志諸君の翼賛によりて出来たる所にして、余は毫も自己の功と信ぜず。ただ諸君の厚情に感佩す。
- ①②は教育理念 ③④は教育方法 ⑤⑥⑦⑧は経営方針と展望 ⑨⑩新島襄個人の願い

2. 建学の精神という言説

- ① 国際主義
- ② 自由主義
- ③ キリスト教主義
- ④ 良心教育

・時代と人によって多様に解釈されてきた。因みに①の国際主義と②良心教育は後世の創作用語

A. 自由・自治主義→新島襄の原体験

- a. 生い立ち→青春の蹉跎 徳川封建身分社会の壁
- b. 読書する新島→憂鬱なる日々 『漂流紀事』・『連邦志略』
- c. アメリカ生活と自由→自由な日本市民 ☞史料1
- d. 自由の観念とキリスト教 ☞史料2、資料3
- e. 自由と自治 ☞史料4、史料5

史料1. 私はボストンの友人たちの支持により教育を受けてきたものであり、日本政府からまだ1セントたりとも支給されたことがない。従って理事官は私を日本政府の臣下として扱う権利はない。

史料2. 耶蘇曰く、我が自由になすものは真の自由なり、真なる哉、此の自由人とは神を信じ天命に随ふ者を云也。乃天命に随ふて而后自由の民となる。（「文明の基」）

史料3. 神の意を体せば、人必ず広く人を愛し、人の為は何事も為し、力を以て人を制せず、威を以て人を脅さず、強くして弱きを扶け、知ありて誇らず、貴くして益々遜り、富ておごらず、賤しくして卑屈に流れず、貧して食らず、甘んじて人の罵詈をも受け、克く人の無礼をも許し、人の幸福を計りて日も足らず、神の義を慕ひて死に至るまで止まず

史料4. 自由の内自ら秩序を得、不羈の内自ら裁制在り

史料5. 道徳の教え立たざれば自由を得るも、また之を我儘に用いる憂いあり。人民は政府に向我儘を申立、子供は親に向我儘を申立、妻は夫に向我儘を申立。貴重の民権を下して下等の我儘と混ざるの憂あれば、国の幸福期し難、我儘起り国家の滅亡の基礎となるも計り難し。

B. 国際主義

- a. 国際主義という用語

日露戦争後の「世界化」、[「世界道徳」](#)、[世界共産主義運動](#)→[国際主義](#)

- b. 愛人主義 ☞史料6、史料7

- c. 同志社の国際主義とは

キリスト教主義を通して培われた「愛人」の観念、世界に貢献する「国際主義」

史料6. 己れ一国を愛し、何事も一国の為に止まりて、兎角愛国より偏ばの心生じ、我が日本を愛して外国を敵視するの憂いなき能はず

史料7. 一人一人を愛するの説は大いに愛国よりは狭きに似れども、人を愛するは、一国に限らず、世界の人をも人と見なして之を愛せば、決して区域の狭きものに非ず。

C. キリスト教主義 ☞小原先生の解説

D. 私学思想

- a. 官立学校にはない私学の役割→人材教育から人民に奉仕する人物教育
- b. 自由・自治の学校→国家やアメリカ宣教師団から自立した学校

E. 良心教育

a. 「同志社大学設立の旨意」➡徳富蘇峰の思想 ㊦史料 8

「所謂良心を手腕に運用する人物を出さんことをつとめたりき」

b. 新島の良心論 ㊦史料 9、史料 10

c. 良心碑の建立の歴史的背景 ㊦史料 11

1930年代の軍国主義の圧力と配属将校の反キリスト教

神棚事件(1935)、同志社教育綱領の制定(1937年3月) 法学部「上申書事件」(1937年3月)、チャペル籠城事件(1937年7月)

d. 新島没後 50 周年記念と良心碑

1940年に建立

- ・湯浅八郎総長と徳富蘇峰が相談➡奥村龍三総務部長の回顧「同志社の良心碑」
- ・キリスト教に代わって良心論を用いる➡配属将校がキリスト教主義の破棄を要求
- ・新島襄が良心を用いている個所を探索➡横田安止宛 1889年12月書簡
➡内容の精査：前後の文脈から考える ㊦史料 12
- ・戦後、湯浅八郎は良心碑を残すか撤去するか考えた発言⇨湯浅八郎への聞き取り調査

(沖田)

史料 8 「クロムウエルが所謂る良心を手腕に運用するが如き〜」(『第 19 世紀日本の青年及び其教育』)

史料 9 「良心を真理に照準して使用」(明治 15 「徳富蘇峰宛書簡」)、

史料 10 「良心の働きを鋭くする事、真理に順ひ真理に反かぬ事」(「文明の元素」年代不詳)

史料 11 「同志社教育綱領」

- ①同志社は敬神尊王愛国愛人を基調とし、之を貫くに純一至誠をもってする新島精神を指導原理とす。
- ②同志社は教育に関する勅語並詔書を奉戴し基督に拠る信念の力を以て聖旨の實踐躬行を期す。
- ③同志社は良心を手腕に運用して国家社会に貢献する人物を要請するを目的とす。

史料 12 政治上の実況は、実に実着なる真面目なる男児の乏しきを覚え、ますます良心の全身に充満したる丈夫の起こり来たらん事を望んで止まざるなり。

徒らに公事に仮て、私欲を逞しうす
慷慨誰か天下に先んじて憂へん
廟議未だ定まらず国歩退く
英雄起こらずんが神州をいかんせん



徳富蘇峰が書いたクロムウエルのような「所謂良心を手腕に運用する」英雄の到来を期待する漢詩

おわりに

1. 新たに付け加えられた国際主義や良心教育の実体を新島襄の言葉と思想から実体化する作業が必要
2. 良心教育とは教育者が良心的であるということか⇒良心的な教育者とは何を指すのか
3. 「良心教育」という教育学的な概念を持っているのか
4. 同志社は良心教育をしているという場合、その実態とは何か



「新島襄とは何者か」という新島襄に立ち帰って実体化する作業が必要

キリスト教主義の来歴と現代的意義

小原克博

1. 新島襄とキリスト教主義

1) 同志社大学成立の旨意 (1888年) ⇨『新島襄 365』【1月24日】

これ基督教主義をもって、我が同志社大学徳育の基本と為す所以、而してこの教育を施さんが為に、同志社大学を設立せんと欲する所以なり。

吾人の目的かくのごとし。もしそれこの事を目して基督教拡張の手段なり、伝道師養成の目的と云う者は、未だ吾人が心事を知らざる人なり。吾人が志す所の者、なおその上に在るなり。吾人は基督教を拡張せんが為に大学校を設立するにあらず、ただ基督教主義は、実に我が青年の精神と品行とを陶冶(とうや)する活力あることを信じ、この主義をもって教育に適用し、さらにこの主義をもって品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ。(波線は小原による追記。以下も)

2) 良心とキリスト教 ⇨『新島襄 365』【8月7日】

生のごときは日暮れて途(みち)遠く、なお克(よく)驚馬(どば)千里を駆くる能(あた)わずといえども、ただただ我が良心を真理に照準して使用し、天より賦与するところの力を竭(つく)して一生を終わらんと欲するのみ。

(1882年、「徳富猪一郎宛」手紙から)

※「真理」=キリスト教。新島は儒教的な価値観・人間観に対し、批判的な距離をとっていた。

3) 愛国心とキリスト教 (国際主義) ⇨『新島襄 365』【8月30日】【9月4日】【9月9日】

偏頗(へんぱ)の愛国心—去り乍(なが)ら愛国と云う語はすなわち己れの一国を愛し、何事も一国の為に止まりて、兎角愛国より偏頗の心生じ、我が日本を愛して外国人を敵視するの憂いなき能わず。古来、人物の往々この弊害に陥り、愛国心を憤起せしむるには必ず外国人を悪(にく)ましむるにありと云われ、或は議論を為し、或は著述を為し、屢々(しばしば)内国人をして外国人を憎ましむるの策略を設くる者ある事少々ならず。予これを見、これ彼の先生方の心の狭くして識者より笑いを受くべき策略と云うべき者と了知す。(中略)

然らば如何にせばこれ等の弊害を防ぎ得るや。これを防ぐの道他なし、各人をして愛人の心を抱かしめ、これを行わしむるにあり。愛人とは何ぞ。且つ如何せば人を愛し得るや。答、愛人とは他人を愛する也。且つ如何せば人を愛し得るや。予、西聖基督(キリスト)の語を用いこれに答えん、すなわち曰く、「己れを愛する如く爾(なんじ)の隣人を愛すべし」。(中略)

一人一人を愛するの説は大いに愛国よりは狭きに似たれども、人を愛するは、一国に限らず世界の人をも人と見なしてこれを愛せば、決して区域の狭き者にあらず。(演説草稿「愛人論」から)

※新島は「国際主義」という言葉を使っていない。海老名弾正(1856-1937、第8代同志社総長)が、新島の教育理念として強調する。

4) キリスト教他教派・他宗教に対する理解

ロシア正教など、プロテスタント以外のキリスト教に対しては否定的(仏教や儒教に対しても同様)。

☞『新島襄 365』【5月12日】【6月1日】(ロシア正教)、【5月27日】(仏教・儒教)、【4月13日】(仏教、勝海舟による評伝)、【1月16日】(儒教)

2. キリスト教主義の来歴——その挫折をたどる

1) 1890年代の同志社

横井時雄の綱領削除問題 ☞『新島襄 365』【1月5日】

2) 1930～40年代の同志社

同志社教育綱領と国体明徴運動 ☞『新島襄 365』【3月2日】

良心碑の来歴 ☞『新島襄 365』【3月9日】

3) 1990年代の同志社

「良心教育」の登場

3. キリスト教主義の現代的意義と課題

1) キリスト教主義の再考

- 「吾人が志す所の者、なおその上に在るなり」(上述)を現代に生かす方法の模索
- キリスト教についての知識を教えることがキリスト教主義ではない。「精神と品行とを陶冶する活力」(上述)を再構築する。水平的な視点だけでなく垂直的(超越的)な視点(「他者の声」としての良心)をどのように獲得するか。

2) 「宗教」としてのキリスト教の再考——どこから来て、どこへ行くのか

- 新島や宣教師らにとって、西洋文明と「宗教」としてのキリスト教は表裏一体であった。キリスト教絶対主義とも言える基本姿勢。
- 「宗教」(religion)とは
religio [ラテン語]: 原義は「結びつける」。社会的(共同体的)秩序・規範性を与える。ローマ的秩序・伝統(皇帝崇拜)に合致するものはreligio、合致しないものはsuperstitioとされた。共同体の支配的成員から見て「他者」を区別する仕組み、差別・排除の論理をreligionは内包している。☞小原克博『宗教のポリティクス』(特に第1章)
- 「宗教」以前——「宗教」からの解放
イエスは「宗教」(ユダヤ教)から人びとを解放した。共同体の境界を越える「自由」の教え(イエスの教

えの普遍性)。イエスは、もっとも弱い者に手を差し伸べるべきこと（隣人愛）を教える。

〔参考〕良心の実践 ⇨『新島襄 365』【11月26日】社会福祉、【1月25日】留岡幸助、【3月15日】【3月22日】山室軍平

しかし、イエスの弟子たちは、もっとも基本的で重要なこの教えを、危機的状況の中で捨て去った。

イエスの磔刑の後、復活のイエスと出会った弟子たちは、イエスの教えに立ち返る。その後、イエスの弟子たちの運動（後のキリスト教）は、典型的な「迷信」（superstitio）として弾圧された。

▶ 「宗教」以降

4世紀、キリスト教はローマ帝国の「宗教」（religio）となる。「宗教」となったキリスト教はローマ的な秩序（差別構造）を取り込むことになる。

3) 現代的課題

イエスの「非宗教的」教え（「宗教からの解放」、ラディカルな「自由」）を回復することは可能か（「非宗教的」キリスト教の可能性）。同志社はその実験場となることができるか。

- ① キリスト教主義の再解釈（アップグレード）
- ② 希釈されたキリスト教ではなく、他の宗教・文化を「愛以てこれを貫く」（⇨『新島襄 365』【12月19日】）濃密さをもったキリスト教
- ③ イエスの越境的な愛の力を「共に知る」（conscience の原義）こと、実践すること。

良心学研究センター主催 公開シンポジウムのご案内

■ 「生命科学と良心——再生医療をめぐる現状と課題」

日時：11月5（火）15:00 - 17:00

場所：同志社大学 今出川キャンパス 同志社礼拝堂

講師：中辻憲夫（京都大学 名誉教授）

コメンテーター：櫻井芳雄（同志社大学 脳科学研究科 教授）、廣安知之（同志社大学 生命医科学部 教授）

※ 同志社大学 良心学研究センター編『良心学入門』（岩波書店、2018年）好評発売中。